

## 類話からの脱却

— *The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnell*

における内的葛藤—

新居 明子

## I

イギリスの Gawain-cycle の一つに分類される作者不詳の中世ロマンス、*The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnell* (以下 *The Wedding* と略す) は、主に二つのモチーフから成り立っている。その一つは、“the Riddle Asked and Answered-motif” であり、これは一人の人間の命がある問題の解答にかかっているというもの、そしてもう一つの “the Loathly Lady-motif” は、醜女が美女に変身するというものである。<sup>1</sup> この二つのモチーフを持つ他の作品としては、例えば Chaucer の *The Wife of Bath's Tale* や Gower の *Confessio Amantis* における “Tale of Florent,” あるいは *The Wedding* に非常に近い内容を持つとされているバラッド、*The Marriage of Sir Gawain* 等が挙げられる。<sup>2</sup>

ところで従来の研究では、*The Wedding* は Chaucer や Gower 等の優れた作品に付属する単なる類話の一つとして位置付けられるのみであるか、あるいはそれらの作品との比較研究により、むしろ質的に幾分劣ったものとして評されるのみであり、一個の独立したロマンス作品として、正面から研究の対象に取り上げられることは稀であったように思われる。おそらくその一因は、しばしば指摘されてきたように、作品中の人物描写が他の類話と比べ極端に類型化されているために、登場人物たちが人間的魅力の乏しい平板な存在になってしまっていることにあると言える。<sup>3</sup>

例えば、*The Wife of Bath's Tale* における騎士は、醜い老婆との結婚にあからさまな嫌悪感を示し、逃れる術のないことを知るや哀れなほど苦悶する。また Gower の物語でも、主人公の騎士 Florent は老婆との結婚に同様の嫌悪感を示しつつも、老い先短い老婆のこと鳥流しにでもすれば野垂れ死ぬだろう、という姑息な考えのもと彼女との結婚を承諾する。あまりに人間的な反応を示すこの二人に対して、*The Wedding* における Gawain はと言えば、主君 Arthur 王の命を救うために、見たこともないほど醜いという Ragnell との結婚を一瞬の躊躇も見せずに快諾し、なおかつ公衆の面前での盛大な挙式をも厭わないのである。実際こうして比較すると、他の二作品に対し *The Wedding* の Gawain は、内面描写の乏しい類型的人物であるように思われる。しかし、本当に彼には何の躊躇も葛藤もなかったのだろうか？

Gawain のこの問題も含め、本稿では *The Wedding* における主要登場人物である Arthur 王、Gawain、Ragnell の三人の人物描写に的を絞り、彼ら三人が円卓を統べる偉大な王、理想的完徳の騎士、Loathly Lady という類型化された描写の中で時折垣間見せる各々の内的葛藤を、作品中の個々のエピソードを拾いながら具体的に考察する。そしてそこから、Gawain-cycle の一つである本作品に対する、従来のものとは異なった解釈の可能性を探ってみたい。

## II

この三人の内的葛藤についての議論を進める前に、まず作品中の各々に対する類型的描写について具体的に検証する。

一人目の主要登場人物 Arthur 王について、William Caxton は *Le Morte D'Arthur* の序文で、“the nine best and worthy, of whome was first the noble Arthur” と絶賛しているが、おそらくこれが当時 Arthur 王に対して広く認識されていたイメージであろう。<sup>4</sup> もちろんロマンス全盛期の作品ともなると、特に円卓を担う個々の騎士たちの独立した冒険談においては、

Arthur 王が担う役割は物語の冒頭と結末部分のみに登場する背景のようなものになってしまっていたのだが、それでも依然として彼は、円卓を統べる偉大な王として認識されていたと思われる。<sup>5</sup>

同様に *The Wedding* における Arthur 王もこの類型的イメージを担っており、本作品の冒頭部分は彼への賛美に費やされている。

Lithe and listenithe the lif of a lord riche,  
 The while that be livid was none him liche,  
 Nether in boure ne in halle;  
 In the time of Arthoure this adventure betid,  
 And of the great adventure that he himself did,  
 That king curteis and royalle.  
 Of alle kinges Arture berithe the flowir,  
 And of alle knightod he bare away the honour,  
 Where-so-ever he went. (1-9)<sup>6</sup>

Carl Lindahl も指摘しているように、通常ロマンス作品にはある登場人物の最初の登場場面に、その人物を端的に表現する形容辞を付ける傾向がある。<sup>7</sup> “king courteis and royalle” という形容辞とともにまず作品の冒頭 9 行にわたって Arthur 王を称賛することで、明らかに *The Wedding* の作者は、彼に「偉大な王」という一般的、類型的役割を担わせるのだという姿勢を、われわれ読者に明示しているようである。

二人目の主要登場人物である Gawain については、依然様々な議論があることは否めないものの、少なくとも Malory 以前のイギリスロマンスにおける彼の人気は絶大なものであったことは確かである。殊に Gawain-cycle と称されるロマンス群においては、しばしば彼は理想的騎士の鑑として描かれている。ちなみに“courtesy”は、Gawain の美德を代表するものとして常に彼と密接な関係にあり、<sup>8</sup> それは例えば Chaucer の *The Squire's Tale*

や、あるいは *The Romaunt of the Rose* の中でも言及されている。<sup>9</sup>

同様に *The Wedding* においても、Gawain は理想的完徳の騎士として描写されており、その証拠に、作品中で彼の名前と共に用いられている形容辞は、例えば “gentile Gawen knyghte,” “corteis knyghte [Gawain],” “curteis Gawen,” “Gawen the good” (142, 685, 700, 192) 等、全て彼を称賛するものとなっている。そして作品中にみられる実際の彼の行動もその輝かしい評判に恥じないものである。例えば冒頭でも触れたように、主君 Arthur 王の命を救うために、彼はその鍵を握る二目とは見られない醜女と結婚することを自発的に引き受ける。Arthur 王が生き長らえるには、Gawain と Ragnell が結婚する他道はないという話を王自身から聞かされた Gawain は、

“Is this alle?” then said Gawen;  
 “I shalle wed her and wed her again,  
 Thoughe she were a fend,  
 Thoughe she were as foulle as Belsabub,  
 Her shalle I wed, by the rood” (342-46)

と、拍子抜けするほどあっさりと返答する。Marc Classer 等の指摘を参考に  
 にするまでもなく、明らかにここで意図されているのは、Gawain の Arthur  
 王に対する “loyalty” の美徳の称賛であろう。<sup>10</sup>

主君への忠誠心ゆえに、“Is this alle?” と Ragnell との結婚を快諾した  
 Gawain であるが、この場面が *The Wedding* への不当な評価の一因となっ  
 ているようである。そこで、この場面における Gawain の反応については  
 後ほど詳しく検討してみたい。ちなみに彼の “loyalty” は、Ragnell との結  
 婚式当日には、“Ther Sir Gawen to her his trouthe plighte / in welle and  
 in wo, as he was a true knyghte” (539-40) とあるように、“trothe” の美徳とし  
 て再度発揮されることになる。つまり Gawain は、聴衆または読者の予想  
 を裏切ることなく、“true knyghte” として Arthur 王との約束を、ひいては

Ragnell との約束を誠実に果たしたことになるのである。

次に三人目の登場人物であり、また本ロマンスのヒロインでもある Ragnell について、その典型的な Loathly Lady ぶりを述べてみたい。Loathly Lady-motif については、古くから G. H. Maynadier や J. K. Bollard をはじめとする多くの研究者たちがその起源に関する考察を重ねており、これまでのところではアイルランド起源説が有力のようである。<sup>11</sup> これはアイルランドあるいはタラの王権を巡る物語群であるが、これらもやはり主人公の男が醜女の要求に応え、その結果彼女は美女に変身するという物語展開となっている。The Wedding における Ragnell も、この古典的モチーフに則った醜女として登場する。Ragnell の醜悪な様子の詳細な描写に費やされた行数を全て引用するには限りがあるため、以下にその一端を示しておく。

Her face was red, her nose snotid withalle,  
 Her mouithe wide, her teethe yallowe overe alle,  
 Withe blerid eyen gretter then a balle;  
 Her mouithe was not to lak;  
 Her teethe hing overe her lippes;  
 Her cheekis side as wemens hippes;  
 A lute she bare upon her back.  
 Her neck long and therto great;  
 Her here cloterid on an hepe. (231-39)

ここで描かれている Ragnell の姿形はまさに人間離れした妖怪そのものであり、いかにも “to rehearse the foulness of that lady, / Ther is no tung may tell” (243-44) というものである。女性の顔や体のパーツごとにその美しさを称える Blazonのごとく、しかしここではその醜さを、口、歯、目、頬というように順に記述している。

このグロテスクな Ragnell の描写を、ロマンスのパターンのひとつであ

る娯楽的要素とすることはできないだろうか。おそらく作者は聴衆への娯楽的効果を狙って、この部分の表現を嬉々として思いつくままに書き付けていたのであろう。そう考えると、初めは“Her neck long and therto great” (238) と長いことになっていた彼女の首が、次には“Neck forsothe on her was none y-seen” (555) というように見えないほど短いことになってしまっている理由も説明できる。おそらく作者があまりに Ragnell の醜悪さを強調して描くことに没頭しすぎたために、このような一貫性を欠くような人物描写になってしまったのであろう。また Ragnell と Gawain の拳式後の宴会における彼女の行動も、その見た目の醜さに勝るとも劣らぬくらいグロテスクなものとなっている。

When the service cam her before,  
 She ete as moche as six that ther wore;  
 That mervailid many a man.  
 Her nailes were long inchis three;  
 Therwithe she breke her mete ungoodly. (604-08)

彼女が六人前の食事を、中世風に手掴みでバリバリと噛み砕いて平らげる様にも、やはり娯楽的効果のようなものを感じる。ちなみに前述の Maynadier は、この花嫁の異常な食欲も *Loathly Lady* のパターンの一つに含まれるとみなしている。<sup>12</sup>

以上のことから、この作品の主要登場人物である Arthur 王, Gawain, Ragnell の三人は、各々キャラクターの類型化というロマンスのパターンにある程度従っている、つまり偉大な王、理想的完徳の騎士、*Loathly Lady* という役割を担いながら、その枠内で行動しているということがわかる。それでは彼らはやはり、従来の解釈通りのロマンスのパターンに縛られた、非現実的、非人間的な存在なのだろうか。

## III

ところが、彼らのセリフ等を丹念に調べていくと、もちろん類型化された枠内ではあるものの、しばしばそこに人間的側面を示唆するような、彼らの内的葛藤を見出すことができるのである。そこで、ここでは彼ら三人の葛藤がいかなるものであったのか、具体的な検討を試みることにする。先の論考と同様に、まず Arthur 王から始めたい。Inglewood の森で王が遭遇した完全武装の男 Gromer は、王に一年後同じ場所に来て、“Whate wemen desired most dera?” (198) という問いに対する答えを用意してくること、そしてこれを仕損じた場合王の命はない、という理不尽な要求をつきつける。この出来事について他言しないという Gromer との約束にもかかわらず、王は Gawain に事の次第を打ち明けてしまう。Gromer との約束の期日が迫ったある日、Arthur 王は自分の求めている答えを教え得るという醜女 Ragnell に出会う。その答えと引き換えに唯一彼女が要求した条件とは、彼女と Gawain が結婚するというものであった。

Arthur 王と Gromer の邂逅の場面における彼の命乞いの様子や、Gromer との約束にもかかわらず Gawain の説得に負けて事情を吐露してしまう場面での様子も、Arthur 王の人間的側面、あるいは内面的葛藤を暗示しているといえる。しかし、彼の葛藤が最も如実に示されているのは、Ragnell が Arthur 王に提示した条件付の申し出を聞いた際の彼のセリフにおいてである。

... “I maye not graunt thee  
 To make warraunt Sir Gawen to wed thee;  
 Alle lyethe in him alon.  
 But and it be so, I wolle do my labour  
 In saving of my life to make it secur. (291-95)<sup>13</sup>

Gawain と Ragnell の結婚については Gawain の気持ち次第なのだから、

自分にはそれを請合う権限はないと宣言する一方で、Arthur 王は Gawain が Ragnell との結婚を拒否しないだろうということも明白に認識しており、“Alas” he said, ‘nowe wo is me / That I shold cause Gawen to wed thee, / For he woll be lothe to saye ‘naye.’” (303-05) と嘆息する。つまり Arthur 王は、Ragnell の申し出に即答はできないものの、嫌とは言えない性分の Gawain なら、十中八九 Ragnell との結婚を受諾してくれるだろうと確信していたのである。この場面における Arthur 王の煩悶の様子は、“Alas! now wo is me” (303) あるいは “I not whate I do may” (308) 等の彼のセリフに凝縮されている。自らの命を救うためとはいえ、良き家臣でありまた同時に良き友でもある Gawain を、筆舌に尽くしがたいほどの醜女と結婚させなければならぬと自覚した際の王の苦悩はいかばかりのものであったらうか。

ここでの Arthur 王の内的葛藤は、他の類話の一つである *The Marriage of Sir Gawain* と比較することでより明白となる。というのも、*The Wedding* とは異なりこのバラッドにおける Arthur 王は、Gawain の返答を待たずにその場で Ragnell の申し出を承諾しているのである。ここでは、自分の生命に固執するあまり家臣を不幸な結婚に追いやらねばならない、という苦しい選択に対する王の葛藤は一切見られない。一方の *The Wedding* における Arthur 王は、上記の葛藤の末結局は Gawain に Ragnell との会話の内容を打ち明けることにするのである。そしてこれに対するもう一人の主人公 Gawain の反応はといえば、前述の “Is this alle?” といういともあっさりとしたものなのである。

ところがこの Gawain でさえも、やはり一個の人間である以上御多分に漏れず、内的葛藤という苦しみを免れることはできなかったようである。彼の最初の葛藤は、Ragnell と迎える初夜の床における二人の会話から読み解くことができる。そもそも Gawain が “Is this alle?” と Arthur 王に返答した時点では、彼はまだ Ragnell と直接の対面をしていなかったため、実は Ragnell の真の醜悪さを理解していた訳ではなかったのである。だからこそ、



一瞬の躊躇も示さずに彼女との結婚を快諾することができたとも考えられる。その後 Gawain が Ragnell の醜さを目の当たりにした時の彼の心理的葛藤は、披露宴に続く初夜のベッドシーンから十分推察できる。<sup>14</sup>

“A, Sir Gawen, sin I have you wed,  
 Shewe me your cortesy in bed;  
 Withe righte it may not be denied.  
 Y-wise, Sir Gawn,” that lady said,  
 “And I were faire ye wold do anoder braid,  
 .....  
 He turnid him her untille.  
 .....  
 “Sir, I am your wif, securly;  
 Why ar ye so unkinde?”  
 “A, lady, I am to blame”

(629-33, 640, 645-47)

“I were faire ye wold do another braid” (640) という Ragnell のセリフには、Gawain が彼女の醜さに対し相応の態度をとっていることが暗示されており、また “He turnid him her untille” (640) という描写からは、Gawain がそれまで彼女に背を向けていたということが示唆されている。また Ragnell に自分の “unkind” な態度をなじられると、彼は “I am to blame” (646) と、自分の行動が花嫁に対するそれに相応しくないことを認め、自分自身を非難し始める。つまりこの場面の会話等から、Ragnell の醜さゆえに Gawain は彼女を正面から正視することができず、彼の行動は “unkind” で “blame” されるべきものであったことが判明する。このように、二人の会話の断片を拾い上げることで、Gawain が Ragnell への嫌悪感と初夜の花嫁に対する夫の務めとのほざまで、大いに葛藤していたことがうかがわれるのである。

Ragnell は美女に変身した後、昼間のみ美しい自分か夜のみ美しい自分のいずれかを選択するよう Gawain に迫り、彼は再び苦しい葛藤を味わうことになる。“Chese on, Sir Knighte, whiche you is levere, / Your worship for to save” (665-66) という Ragnell の言葉や、“And my worship shold I lese” (672) と名誉を失うことを恐れる Gawain の言葉からも明白なように、ここで Gawain が問題にしたのは自分の“worship”についてである。この“worship”あるいは“honor”という概念は、ロマンスの騎士にとって自らの存在意義にも関わる最も重要なものであり、作品中で Gawain が度々発揮した“loyalty”や“troth”等の騎士道的美徳の最大の動機ともなるものである。<sup>15</sup>この名誉を失う可能性を秘めた葛藤と戦いそれを克服した結果、最終的に Gawain はその選択権を Ragnell 自身に委ねるという宮廷風ロマンスの騎士に相応しい道を選ぶことにする。このように、彼が理想的なロマンスの主人公として描写されていることは明白であるものの、これらの内的葛藤を示す様子からは、一概に彼の人物描写が平板かつ典型的であると断言できないように思われる。

次にヒロイン Ragnell の葛藤についての考察に移りたい。すでに検討した他の二人と比較すると、彼女の内面を感じさせる箇所はより微妙であり、それらは彼女のセリフの方々にさりげなく示唆されているのみである。その具体例をいくつか挙げると、例えば継母が自分にかけて魔法を解くために、Gawain と是が非でも結婚したい Ragnell は、Arthur 王に以下のように懇願する。

“Forsothe,” said the lady, “I am no qued.

.....

For it must be so, or thou art but ded;

Chose nowe, for thou maiste sone lose thine hed.

Telle me nowe in hying.”

.....  
 ... "nowe go home again  
 And faire wordes speke to Sir Gawen,  
 For thy lif I may save.  
 Though I be foulle, yet am I gaye;

(279, 288-90, 297-300)

彼女のセリフからは、自分にかけられた魔法については語るができないという葛藤の中で、自分を“qued”ではないと弁護したり、自分の申し出を受けなければ首を失うことになる Arthur 王を脅迫したり、その一方で唐突に “I am gaye” と自分の長所のアピールを試みてみると、何とか Arthur 王を説得したいという彼女の涙ぐましい努力が滲み出ている。

また “Of no man I wolde shame” (511) と誇り高く宣言する一方で、自分の醜さに関しては、“For thy sake I wold I were a faire woman” (537), あるいは既に Gawain の箇所 で引用した “And I were faire ye wold do another braid” (633) と、弱々しい本音を吐露している。ある意味では、この種の「もう少し美しければ」という葛藤は、時代を問わない女心の普遍的葛藤とも言えるであろうが、少なくとも他の類話における Loathly Lady たちは、このような自分の醜さに対する葛藤を一切見せていないということは、この場合注目に値すると思われる。

#### IV

以上のように見てくると、しばしばそれは明白なものであったり、あるいはふとしたセリフにほのめかされているだけのものであったりと、程度の差こそあるものの、従来の評価と異なり *The Wedding* の登場人物たちが様々な葛藤を抱えているということがわかる。

ちなみに、これまで検討してきたような主人公たちが内的葛藤を示す場面

では、彼らのセリフの随所に“in hying”あるいは“tight,” “in haste,” “anon”等の、「急いで」というフレーズが用いられている。例えばそれは Arthur 王と Ragnell が対峙した際、両者の口から発せられるし、また Gawain との結婚を目前に控えた Ragnell のセリフにも見られる。<sup>16</sup> このフレーズによって、彼らの内的葛藤はより増幅されまた強調されているのではないだろうか。そしてさらには、この“in haste” “anon”という言葉のリフレインが、当時の聴衆あるいは我々読者にまで、その焦りの感覚を伝染させ、主人公たちの葛藤を一層高めるという効果を持っていることも見逃せない。

本稿の冒頭において、本作品は作者不詳のロマンスであると述べたが、一説によるとその作者は Malory である可能性が高いということである。<sup>17</sup> Arthur 王の誕生から死に至るまでを描いた一大叙事詩というその規模の大きさや、主君の妻 Guinevier への愛と Arthur 王への忠誠の狭間で葛藤する Lancelot、最愛の弟 Gaherys と Gareth を盟友 Lancelot に殺害されてしまう Gawain 等の、登場人物たちに対する優れた人物描写の水準には遠く及ばないものであるにせよ、仮に *The Wedding* が Malory の初期の作品であるならば、ここに既に登場人物の内的葛藤の萌芽が暗示されているといえるだろう。

これまで Chaucer や Gower の類話のひとつとして扱われるのみで、それ以上の評価を受けることがほとんどなかった *The Wedding* であるが、その類話という枠組みを離れて一個のロマンスという観点から改めて注意を向けると、この作品が同時代の代表的ロマンスと比べ何ら劣るところのない魅力的な作品であることがわかる。そしておそらくその魅力の一つは、Ragnell の醜悪さ等に集約される娯楽的要素に加え、この作品が“the Riddle Asked and Answered”と“the Loathly lady”という二つのモチーフや、キャラクターの類型化というロマンスのパターンに則ったものである一方で、主要登場人物である Arthur, Gawain, Ragnell の三人が、そのパターンを超えた内的葛藤を示しているところにあるといえるだろう。

## 注

\* 本稿は、日本中世英語英文学会第15回西支部例会（神戸大学，1999年6月12日）における口頭発表の原稿に、加筆修正を施したものである。

- 1 Thomas J. Garbáty, ed., *Medieval English Literature* (Lexington: D. C. Heath and Company, 1984) 418.
- 2 G. H. Maynadier は *The Wife of Bath's Tale: It's Sources and Analogues* (London: David Nutt, 1901) 1-24 の中で、イギリスにおける Chaucer の類話について検討している。本文中のもの他には、*King Henry, The Daughter of King Underwaves* 等が挙げられている。ちなみに、*The Wedding* や *The Marriage* の制作年代は、Chaucer や Gower の約 100 年後の 15 世紀半ばということである。Garbáty 418 参照。
- 3 例えば Robert W. Ackerman は、"The English Rimed and Prose Romances," *Arthurian Literature in the Middle Ages: A Collaborative History*, ed. Roger Sherman Loomis (Oxford: Clarendon, 1959) 504. において、"The author of *The Wedding*. . . shows meagre talents both as a story-teller and as a poet. There is no subtlety or refinement of feeling, nothing to suggest the depth of his hero's repugnance at the thought of marrying the hideous forest hag" と *The Wedding* を酷評している。その他、Eiichi Suzuki, "A Reading of *The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnell*," *POETICA* 2 (1974): 44-45 参照。
- 4 William Caxton, original preface, by Thomas Malory, ed. Janet Cowen, vol. 1 (London: Penguin, 1969) 3.
- 5 Rosemary Morris, *The Character of King Arthur in Medieval Literature* (Cambridge: D. S. Brewer, 1982) 71, 74.
- 6 本稿における *The Wedding* からの引用は全て Donald B. Sands, ed., *Medieval English Verse Romances* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966) に従うものとし、括弧内に行番号を示す。
- 7 Carl Lindahl, "The Oral Undertones of Late Medieval Romance," *Oral Tradition in the Middle Ages*, ed. W. F. H. Nicolaisen, *Medieval & Renaissance Texts & Studies* 112 (Binghamton: State U of New York, 1995) 74.
- 8 B. J. Whiting は "Gawain: His Reputation, His Courtesy and His Appearance in Chaucer's *Squire's Tale*," *Medieval Studies* 9 (1947): 189-243 の中で、中世イギリスロマンス作品の中で Gawain と "courtesy" が結び付けられている回数を数え上げている。また同時に、Gawain のフランスロマンスにおける性格描写と不人気についても考察を加えている。

- 9 各々の Gawain への言及箇所は, “That Gawayn, with his alde curteisye,” と “Gaweyn, the worthy, /Was praysed for his curtesye.” Geoffrey Chaucer, *The Riverside Chaucer*, ed. Larry D. Benson, based on *The Works of Geoffrey Chaucer*, 3<sup>rd</sup> ed. (Boston: Houghton, 1987) 170; Ronald Sutherland, *The Romaunt of the Rose and Le Roman de la Rose: A Parallel-Text Edition* (Oxford: Basil Blackwell, 1967) 44.
- 10 Marc Glasser, “The Forced Marriage in the ‘Wife of Bath’s Tale’ and Its Middle English Analogues,” *Neuphilologische Mitterlungen* 85 (1984): 240.
- 11 LoathlyLady-motif のアイルランド起源説は, 多くの批評家の指摘するところである。J. K. Bollard, “Sovereignty and the Loathly Lady in English, Welsh and Irish,” *Leeds Studies in English* 17 (1986): 41 参照。
- 12 Maynadier 120.
- 13 本引用文をはじめ, 主要登場人物たちの葛藤を示す場面の彼らのセリフには, “maye,” “wolle,” “shold” 等の法助動詞が多用されている。話者の心的態度を表現するための手段である法助動詞と, これらの場面の関係については今後の研究課題としたい。中尾佳行氏のご助言に感謝する。
- 14 非常に残念なことに, 新郎新婦が披露宴会場を退場し寝室に向かう場面を描いたと考えられる写本は, この頁のみ欠損してしまっている。
- 15 Sidney Painter は *French Chivalry: Chivalric Ideas and Practices in Medieval France* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1940) 28-36 において, 騎士道的美徳である “prowess,” “loyalty,” “generosity,” そして “courtesy” 等の最大の動機が “desire for glory” であるとしている。
- 16 具体的には, “tichte” (270), “shortly” (274), “in haste” (403), “in hying” (290, 521), “anon” (531) 等が挙げられる。なお, これらは脚韻のためのいわゆるタグフレーズとして用いられることが多いため, 登場人物の内的葛藤とこれらのフレーズを関連づける私の説には, 異論があるかと思われる。しかし *The Wedding* のみに議論を限れば, これらはほとんど登場人物の葛藤に関連のある箇所で使用されているため, このフレーズの持つ効果を完全に無視することはできないと思われる。
- 17 P. J. C. Field, “Malory and *The Wedding of Sir Gawain and Dame Ragnell*,” *Archiv* 219 (1982): 375-76.